

現代における瓜子姫

藤井 倫明

はじめに

昔話は口承文芸であるが、近年は伝統的な語りで昔話に触れたというひとは、とくに都市部では減少していると思われる。

首都圏の学生を中心に独自のアンケート調査を行ったが、この結果から見ても二十歳前後の世代にとって昔話はすでに「聞く文学」ではなく「読む文学」に変わりつつあるという傾向が見られた。⁽¹⁾

以上の傾向から、現代における昔話の状況を考察するためには、書かれた昔話、とくに多くのひとなにとって、最初に昔話に触れる機会となると思われる児童向けに再構成されたものを確認することが必要であると考ええる。

今回は児童向けに再構成された、昔話「瓜子姫」を題材として考察を行う。「瓜子姫」という昔話は、採話例が多く伝播している地域が広い昔話であるが、児童向け書籍として出版された

数はそれほど多くなく、アンケートでも高い知名度はないという結果が出た。⁽²⁾ なぜこのような結果になったのかということを考察することにより、口承の昔話と現在の書かれた昔話に求められるものの違いを論じることができると考える。

今回は、主に児童向けとして再構成された「瓜子姫」を題材としてとりあげる。そのため、語り手による昔話を筆記したものは今回の研究対象に含めない。児童向けと一般向けの線引きは曖昧であることも多いが、基本的に再構成者が児童を主要な読者として想定しているものを「児童向け」とする。また、今回は児童向けであっても地域別の昔話集に収録されたものは取り扱わない。再構成者が、なぜこの話型を選んで再構成したのか、という問題についても考察を行うが、地域別の昔話集に掲載されているものは、著者による話型の選択肢が狭いと考えられるためである。

なお、ビジュアルの側面が強い絵本とテキスト量の多い児童書は分けて考察すべきという意見も存在するが、今回は児童向

け「瓜子姫」の歴史を俯瞰する、ということに重点を置くため、基本的には分けずに考察する。この昔話の題名および女の子の名は地方によって異なるが、論中では基本的に作品名は「瓜子姫」、主人公の女の子は「姫」とする。

1、近代以降の「瓜子姫」の歴史

児童書は図書館などの施設に所蔵されていないことも多く、失われたものも多いと考えられる。全てを確認することはほぼ不可能な状況のため、今回は「自身の目で確認できた資料」を中心として考察を行う。

○明治・大正期の「瓜子姫」

明治・大正期には論末の年表1番～8番までの児童向け「瓜子姫」が確認できる。

この中でとくに注目したいものは、年表1番・高野辰之『家庭お伽話』所収「瓜姫」(以降1番)と年表4番・楠山正雄『日本童話宝玉集下』所収「瓜子姫子」(以下4番)である。

『家庭お伽話』は、当時、春陽堂から発行されていた雑誌であり、海外の昔話と日本の昔話を一話ずつ紹介していた。なお、当時は現在では昔話として分類するものも童話と称することが多かった。

現時点で確認できたかぎりでは近代以降でもっとも古い児童

向け「瓜子姫」である。高野辰之は、日本の昔話が失われていくことに危機感を抱き、全国の小学校教師などの協力を得て昔話を採取していたが、どの地方の「瓜子姫」を元としたのかという点にかんしては不明である。

1番は以下のような展開をとる。

① 婆が川で瓜を拾い、米櫃にしまう。爺が帰ってから切ろうとすると、瓜はひとりでに割れて中から女の子が出てくる。
② 爺婆は女の子を瓜姫と名付ける。姫は大きくなると美しく機織りの上手な娘となる。

③ ある日、爺婆は姫の機織りに必要な道具を調達しに出かける。あまのじやく天探女という悪者に気をつけろと注意する。

④ 天探女がやってきて「指の入るだけ」「手が入るだけ」「頭の入るだけ」とすこしずつ姫に戸を開けさせ、家の中に侵入する。

⑤ 姫を柿とりに誘い、あまりしつこく誘うので姫も根負けしついでに行く。

⑥ 天探女は自分ばかりが柿を食べ、姫には種やへたを落とす。

⑦ 姫が上る番になると天探女は「着物が汚れるから」と自分の着物と交換する。姫が木に上ると、蔓で姫を縛る。

⑧ 家に帰り姫のふりをして帰ってきた爺婆をだます。

⑨ 五、六日ほどして殿様から姫を若の嫁に、という話に来る。

迎えの籠に姫に化けた天探女が乗る。

⑩籠が姫の縛られている木の前を通ると姫が叫んで真相を知らせる。姫は助けられて城へ向かう。

⑪天探女は侍に切り殺されそはの畑と萱原に捨てられる。そはの根と萱の根はこのときに血で染まったため、いまも赤い。

基本的な流れは西日本に多い「生存型」である。全体的に文章が装飾され長めとなっている。

『日本童話宝玉集』は富山房による児童向けシリーズ『模範家庭文庫』のひとつである。『日本童話宝玉集』は当時よく読まれ、評判も悪くはなかった。^④のちに上下巻をまとめた大判『巨人版』、再編集して全三巻にしたものも発行されている。

4番は以下のような展開をとる。

①婆が川で瓜を拾う（米櫃には入れない）。爺が帰ってから切ろうとすると、瓜はひとりで割れて中から女の子が出てくる。

②爺婆は女の子を瓜子姫と名付ける。姫はかわいいらしい小さな女の子で機織りが好き。

③爺婆はでかけの際、あまのじゃくという悪者に気をつけろと注意する。

④あまのじゃくがやってきて「指の入るだけ」「手が入るだけ」「頭の入るだけ」とすこしずつ姫に戸を開けさせ、家の中に侵入する。

⑤姫を柿とりで誘う。姫がことわると怖い顔でにらみつけるので、姫はしかたなくついていく。

⑥あまのじゃくは自分ばかりが柿を食べ、姫には種やへたを落とす。

⑦姫が上る番になるとあまのじゃくは「着物が汚れるから」と自分の着物と交換する。姫が木に上ると、蔓で姫を縛る。

⑧家に帰り姫のふりをして帰ってきた爺婆をだます。

⑨ほどなくして城から「殿様と奥方様が姫の機織りを見たい」と使いが来る。迎えの籠に姫に化けたあまのじゃくが乗る。

⑩籠が姫の縛られている木の前を通ると姫が叫んで真相を知らせる。姫は助けられて城へ向かう。

⑪あまのじゃくは侍に切り殺されきび畑に捨てられる。きびがらが血で染まったため、いまもきびは赤い。

展開の通し番号は1番の同じ場面と対応させている。また、傍線を引いた箇所のもちーフが1番とは大きく異なる。

傍線部以外にも細かい違いは見られるが、全体的な流れは高野辰之のものとはほぼ同じである。楠山正雄は『日本童話宝玉集』を作る際に参考とした先人のひとりに高野辰之の名をあげており、^⑤4番は1番を参考としていと考えられる。

4番は1番と比較して、姫が「小さな女の子」であること、城へ行くのが「嫁入り」ではなく、「殿様と奥方様に機織りを見せるため」など姫が「子供」であることを強調している。読者

がより感情移入できるように、読者層である小学生に近い年齢設定を意識したものと思われる。また、城からの迎えは爺婆が帰ってきてからすぐになっており、1番で姫が五、六日も木に縛られたままでいるのに比べて姫の受難が軽減されている。これも児童層を意識し、読後感を柔らかくしようとした配慮であると推定される。

その後の児童向け「瓜子姫」の多くは、年表でも記したように4番と同様の展開をとるものや同様のモチーフを含むものが多く見られる。⁽⁶⁾そのことから、4番は、近代以降の「瓜子姫」の典型話のひとつとして非常に大きな役割を果たしたものであると考えられる。以降、高野辰之が取り入れ楠山正雄が完成させて広めたこの型を便宜上「I型」とする。

○昭和期以降の「瓜子姫」

昭和の戦前・戦中は児童向け「瓜子姫」は非常に少ないが、戦後は児童向け「瓜子姫」の点数も増加している。昭和期の児童向け「瓜子姫」には以下のような特徴が見られる。

第一に、「瓜子姫」単独での書籍が出版されるようになったということがある。昭和以前は「瓜子姫」は昔話集や童話集に収録されたものだけであったが、戦後になり単独の書籍、とくに絵本として出版されるようになった。年表でも見られるように、戦後になり児童向け書籍の点数は飛躍的に増えている。戦後になって社会や経済が安定し、多くの児童向け書籍が求められる

ようになり、また出版技術の向上などで書籍が安価に製作できるようになった。そのため、「瓜子姫」も単独の書籍として出版される機会に恵まれるようになったと考えられる。

次に、タイトル及び姫の名は「うりこひめ」がほとんどとなる、ということがあげられる。論末の年表にあるように、戦前は「うりひめ」「うりこひめこ」とされることが多かったタイトル及び姫の名が、戦後はほぼ「うりこひめ」となる。また「うりこひめ」とあまのじゃく」のように外敵の名を併記したものも増加する。

次に、昔話の採り・研究が進み、内容が多様化する。このことはタイトル及び姫の名が「うりこひめ」となったことと合わせて、以下で論考することとしたい。

昭和期の児童向け「瓜子姫」でとくに注目したいものは年表10番・柳田国男『日本の昔話』所収の「瓜子姫」（以降10番、年表17番・関敬吾『空にのぼったおけやさん』所収の「うりひめ子」（以下17番）である。

柳田国男『日本の昔話』は、日本全国の昔話を集め、児童にもわかりやすいよう手を加えたものである。現代でも文庫本で発売され容易に手に入るロングセラーである。

島根で採取された物がもとになっており、基本的な筋は「生存型」で、I型と同じであるが、あまのじゃくは姫を裏庭の柿の木に縛る、爺婆は姫を鎮守様の祭りに連れて行くこととする、といった点が異なっている。

10番以降、タイトル及び姫の名を「瓜子姫」とするものがほとんどとなる。それ以前は「瓜姫」か「瓜子姫子」が多かったことを考えれば、大きな変化と言える。

全国的な採話例を見ると、姫が「瓜子姫」という名で呼ばれることは少なく、「瓜姫」「瓜姫子」とされることが多い。しかし、柳田国男は10番、および研究論文『桃太郎の誕生』⁷において、姫を「瓜子姫」と称している。昔話研究の第一人者である柳田国男が「瓜子姫」という名を用いたことにより、この名称が一般的になったのではないかと考える⁸。

関敬吾『空へのぼったおけやさん』は柳田の昔話集と同じく、各地の昔話を集め、それを児童向けに書き直したものである。採話地は秋田県平鹿郡と明記されている。

17番の内容は以下の通りである。

A 婆が川で箱に入った瓜を拾う。その瓜の中から女の子が生まれる。爺と婆はその子に「うりひめ子」と名付ける。

B うりひめ子は美しい娘に育つ。爺婆が留守の間にあまのじやくという「悪い女」がやってきてうりひめ子を桃とりへ連れ出そうとする。

C うりひめ子は「草履はいや」「下駄はいや」と連れ出されるのを拒むが、結局桶に入ってあまのじやくに負ぶわれ、桃とりへ行く。

D あまのじやくはうりひめ子を木へのぼらせ、高くのぼったと

ころで脅かす。うりひめ子は驚いて木から落ちて死亡する。
E あまのじやくはうりひめ子の皮を剥ぎ取り、それを被って化ける。

F あまのじやくは策を用いて長者の嫁に行こうとする。

G からすが真相を伝え、あまのじやくは正体をあはかれる。

H 爺婆はあまのじやくを菅原で引きずりまわす。あまのじやくが流した血で萱の根は赤い。

17番以降、とくにCの姫とあまのじやくの軽妙なやりとり、Gの鳥による真相の暴露といういままでの児童向け「瓜子姫」では見られなかったモチーフを含むものが多くなっている。17番の後に『日本昔話集成』（以下『集成』）が発刊されるが、そこで「瓜子姫」（集成では「瓜子織姫」）の典型話として載せられているものは、ほぼ17番とおなじである。また採話地も「うりひめ子」と同じ秋田県平鹿郡と明記されている⁹。昔話研究の第一人者である関敬吾がこの型を自身の昔話集、および研究書の典型話として選んだため、この型を取り入れる児童書が増えたものと考えられる。

また、17番の型を取り入れた作家の中に有名な人物がいたことも、この型を広める大きな要因であったと思われる。とくに注目したいのは坪田譲治と松谷みよ子である。

坪田譲治による「うりひめこ」は、ほぼ17番と同じ展開であり、関敬吾のものを参考にした可能性は高い。坪田譲治の昔話

集は生前から現在まで「全集」「選集」という形で度々再販されているが、「うりひめこ」もほぼ収録されている。

松谷みよ子は「瓜子姫」を好きな昔話のひとつにあげ、作品の題材として何度も取り上げている。その多くは、17番と近い。松谷みよ子の児童向け「瓜子姫」は、タイトル及び姫の名を「うりこひめ」（タイトルは「うりこひめとあまのじゃく」のように敵役の名を併記することが多い）とし、Dの部分を改定し、姫が縛られるだけで死亡しない「生存型」に改めている。また、Fの部分を削りBの時点で姫の嫁入りが決まっており、爺婆が留守にするのは、姫の嫁入り道具を買いに行くため、とされていることが多い。松谷みよ子の手による児童向け「瓜子姫」は点数も多く、現在もとても多くのひとが触れる機会が多い児童向け「瓜子姫」であると言える。

17番の型は関敬吾がはじめて児童向けに取り入れ、坪田譲治・松谷みよ子を経て広まったという事ができると思われる。⁽¹²⁾以降関敬吾が採用し、坪田譲治・松谷みよ子が広めたこの型を便宜上「Ⅱ型」とする。

柳田国男は「うりこひめ」という名称を確立させ、関敬吾は「姫とあまのじゃくの軽妙なやりとり」「鳥による真相の暴露」という新しい展開を持ち込み、新たな典型話を確立させるのに一役かったと言えるだろう。昔話研究者である柳田国男と関敬吾が昭和期以降の児童向け「うりこひめ」の典型話を形成したということが確認できる。

昭和の後期からテレビアニメのような挿絵を使用した「アニメ絵本」と呼ばれる昔話絵本が台頭し始めた。平成期には安価な値段と若い世代に好まれる絵柄で大きく普及したと考えられるが、「瓜子姫」にかんしては、アニメ絵本はきわめて少ない。⁽¹³⁾また、数多くの昔話や童話をあつめ、「ひとつの話を数ページ単位」でまとめたアンソロジー本も多く発行されるようになり、「瓜子姫」も収録されることが多い。価格に対して話が多く収録されているというコストパフォーマンスの良さから近年普及しており、それで「瓜子姫」を知った児童が増えている可能性も考えられる。

現在の児童向け「瓜子姫」には、「Ⅰ型」「Ⅱ型」ふたつの典型話と呼べるものがあることが確認できた。それ以外にも関敬吾が岩波文庫で紹介したものを元にした型、中国地方の「道の選択」のモチーフを取り入れた型、木下順二のように独自のモチーフを盛り込んだものなど非常に多彩である。口承の時代から多様な型を持つ昔話である「瓜子姫」は、「読む昔話」に変わった状態でもその多様性を保ち続けているということが出来る。

2、「瓜子姫」の現状

「瓜子姫」は、採話数の多さや伝播の広さに対して現在ではあまり高い知名度はないと思われ、児童向けの書籍数も決して多

くはない。忘れ去られてしまったというわけではないが、なじみ深いとも言い難い状況である。

また、アンケートにおいて「瓜子姫を知っている」とした回答者でも、覚えている内容はあやふやであることが多く、印象の薄い昔話となっている可能性も否定できない⁽¹⁵⁾。理由として、まずは歴史的な問題をあげることができる。

現在、よく知られている昔話はその多くが「近世期に絵本で有名になった」ものである。「瓜子姫」は広く伝わってはいたものの、その地域は農村や地方都市であり、出版文化が盛んな地域ではほとんど知られていなかった⁽¹⁶⁾。そのことが、近代以降の出版文化に乗り遅れる原因となったと考えられる。「聞く昔話」としては有名であったものの、「読む昔話」としては有名になれなかったということとなる。

次に内容の問題をあげることができる。児童向け「瓜子姫」の作家のひとりである平林英子は、現代において瓜子姫が普及していない理由を以下のように考察している。⁽¹⁷⁾

かずかずの昔話の中で、子供たちに喜ばれる、代表的なものには、桃の中から生まれた『桃太郎』とか、竹から生まれて、やがて月へ還っていく『かぐや姫』など、美しいロマンと、夢のある話がいくつもあるが、瓜の中から生まれた『瓜子姫』の話は、各地方にたくさん残っている割には、一般的に普及していないようである。

その理由は、この話の中には、ロマンがないばかりか、子供の読み物として、少々品もなく、瓜姫の敵役である「天邪鬼」の行動に、少々陰惨なところがあるからではないかと、思われる。(以下略)

平林英子の個人的な感想の側面も強いと思われるが、私もこの意見におおむね賛成である。平林英子の指摘を掘り下げるため、他の有名な昔話や、学術的な意味では昔話ではないものの、現在の児童書などでは昔話として扱われる事の多い古典などを例にあげ、これらと「瓜子姫」の現在の一般的な読者の見方の比較を試みることにしたい。比較することにより、問題点が浮き彫りになると考えるからである。なお、今回は現代における一般的民俗学の知識を持たない層の感じ方の考察であるため、民俗学的な意味や伝統文化としての価値などは、あえて考慮しないで述べる。

まず、ロマンのなさという指摘にかんして考察する。「桃太郎」などは、通常では考えられない誕生の仕方をした主人公が、一見すると役に立たなさそうな仲間を連れて、悪者を倒すという活躍をする、非常にわかりやすい、爽快感が満載な話であり、「猿蟹合戦」「かちかち山」などは仲間の特徴を生かしての巧妙な作戦、泥の船という奇想天外な仕掛けなどによって仇討ちをとげており、カタルシスの要素が非常に強いと言える。それに対して、「瓜子姫」は、ただ通常では考えられない誕生の仕方

した姫が外敵にいじめられるという、少なくとも現代の一般的な読者にとっては、なにを語りたいのかわかりにくい昔話であると言える。外敵に対する復讐も「猿蟹合戦」や「かちかち山」のような魅力あるものではなく、読後の爽快感があまり得られないと思われる。

『竹取物語』を元とした「かぐや姫」や「浦島太郎」などは月への帰還、海の中にある竜宮城などの壮大で夢のあるモチーフが含まれている。それに対して、「瓜子姫」にはこのような壮大で夢のある要素は少なく非常に地味な昔話となっていると思われる。

御伽草子の「鉢かづき」やグリム童話の「白雪姫」などは、困難があつたが故に幸せに巡り会えたという、負の要素が正に変化するカタルシスがある。それに対して、姫の結婚や殿様からの褒美などの姫の幸せは、外敵の妨害以前から決まっていたことであり、外敵の妨害があつたため、姫がより幸せになった、ということもない。あまのじゃくの行動は姫にとって負の意味しかないと言える。このように、有名な昔話と比較して、ロマンと言える要素が少ないと考えられる。

次に、品のなさという指摘を考察する。少女がひとり留守番をしているところに外敵が侵入してくる、少女が着物を剥ぎ取られて木に縛られるなど性的な要素を連想させる。とくに近年はあまのじゃくを男性として描くものが多いためなおさらその印象が強くなる。

次に、敵役の陰惨な行動、という指摘を考察する。「瓜子姫」の敵役は動機がはっきりとしないことがほとんどであるうえに、単なるいたずらにしては、木に縛って置き去りにする、など明らかにやりすぎであると言える。

このように「瓜子姫」は現在有名な昔話と比べて、一般的な見方では「地味」「爽快感がない」「ロマンがない」ということになる。必ずしもそれが悪いというわけではなく、またこれらの要素は民俗学においては非常に重要な要素を含んでいるモチーフである。しかし現在において「児童向け」に求められるものではないと思われる。

また、平林英子が指摘する点以外にも、現在多くのひとにとって昔話に最初に触れる媒体である絵本との相性の悪さ、という問題もあると考える。

「絵本」の定義を、文章に比べて絵の割合の多い書籍として定義すると、本来の語りよりも絵による視覚的な要素が大きくなる、という特徴がある。

「瓜子姫」を絵本にすると、現在の都市部ではほとんど見られなくなつた「瓜」「機織」といったものが絵で表現されており、そういったものになじみのない児童でも疑問を抱くことなく物語にはいることができるというメリットがある。その反面、多くのデメリットもあると考えられる。

まず、絵にした時に映える要素がない、というデメリットが挙げられる。「瓜子姫」には「竜宮城」「月への帰還」のような

視覚的に映えるモチーフはない。「かぐや姫」のように「舞台は都」「姫は金持ちの娘で立派な着物を着ている」のではなく、「舞台は農村」「姫は庶民の娘」であり、視覚化しても地味である。

次に、あまのじゃくの表現の困難というデメリットが挙げられる。児童向け「瓜子姫」で、もともと多く採用される外敵である「あまのじゃく」は、様々な側面を持った存在である。そのため、絵で表現することが非常に難しく、児童読者に「結局あまのじゃくとはなんなのか」といった疑問を抱かせる結果となる可能性がある¹⁹。

次に、視覚化に向かない要素が多いというデメリットも挙げられる。女の子が悪者によつて着物を奪われて縛られるという、児童向けのものとして絵にするには不適切とも思える場面が存在する。また、あまのじゃくは鬼として描かれることが多く、瓜子姫と体型や容姿が大きく異なつて描かれるばあいが多々ある。そのため、入れ替わりを絵で表現すると、なぜ、周りの人が誰もこの入れ替わりに気づかないのか、という疑問を抱かせてしまうこととなる。

これらは伝統的な「語り」であればそれほど気にはならないが、視覚効果をいれてしまうと目立ってしまうという問題がある。このように、「瓜子姫」は絵本、即ち「見る昔話」にするのには向いていない昔話であると言うことができる。

これらの要素があわさり、「瓜子姫」は現在においてやや知名度の劣る昔話になっているものと考ええる。

柳田国男は「瓜子姫」について以下のように述べている。²⁰

……それが文筆の士に採録せられなかった故に、人が久しく是に心付かなかつただけで、其代りには又所謂五大御伽噺に見るような、新奇なる潤色を受けずに済んだのである。

伝統的な形を残しているという良い側面はあるが、それゆえに「読む昔話」「見る昔話」といった新しい形態に合わせて変化できなかったとも言えるのではないだろうか。

3、おわりにかえて

近年はアンソロジー本が隆盛である。アンソロジー本の多くはひとつの話に割り当てられるページ数が少なく、内容は簡潔である。また、多くの話の中に紛れて、ひとつひとつの話が埋没してしまう可能性も高い。「瓜子姫」に限らず、現在、それほど有名でない昔話はさらに埋没し、忘れ去られてしまう可能性がある。

長い間語られ、愛されてきた「瓜子姫」が、このまま一部の愛好家しか知らない昔話になってしまうのはとても寂しく残念であると思うので、本来の魅力を保ちながら、より多くのひとに「瓜子姫」を知ってもらえるにはどうするか、ということもこれから考えていきたい。

今回は絵本と一般児童書を分けずに考察したが、第二章で触れたように絵の持つ視覚的效果は無視できないものと思われる。「絵本」と「挿絵の多い児童書」との線引きも含め、「瓜子姫」の絵本の歴史をたどってみたいと考える。

また「瓜子姫」に限らず多くの昔話は「演じる」ものとも深いかかわりがあると考ええる。具体例をあげると、紙芝居・舞台・朗読劇・人形劇・アニメなどである。未来の昔話を考えるにあたって、今後はこれらの媒体で再構成されたものも考察も試みることとしたい。

注

(1) 拙稿「現代における「瓜子姫」への認識」『立正大学大学院 日本語・日本文学研究』一四 二〇一四

(2) (1) 参照 「瓜子姫」を知っているという回答は「タイトルだけは知っている」という回答も含めて四割に満たなかった。また岩沢文雄・小松崎進『民話と子ども』

一九七〇 鳩の森書房 第二章で、当時の児童に「好きな昔話」「嫌いな昔話」のアンケートを取っているが、「瓜子姫」はどちらもランク外であった。ランクに入るほどの知名度もなかった、ということになると考えられる。

(3) 野沢温泉村斑山文庫収集委員会編『志をはたして 高野辰之その学問と人間像』一九九二 野沢温泉村教育委員会

(4) 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 六八』

一九九四 昭和女子大学近代文化研究所・楠山三香男『楠山正雄の戦中・戦後日記追補―文芸の志 明治・大正と磨き昭和に結ぶ―』二〇一〇 富山房

また、昔話(童話)をどのようにして学校教育に生かすのかということ論じた五味義武・山本誠子・田原美栄『低学年教育 童話教材とその活用』では「瓜子姫」も取り上げているが、参照にしているのは『日本童話宝玉集』所収のものである。

(5) 高野辰之『巨人版 日本童話宝玉集』一九三八 富山房

(6) ①あまのじゃくが姫に徐々に戸を開けさせる ②怖い顔をしておどかして連れ出す ③「汚れるから」と着物を交換

④突然、殿様の迎えが来て「殿と奥方が機織りを見たい」と言う ⑤姫が真相を告げる ⑥あまのじゃくは切られ、作物が染まる

このうち 他にはほとんど見られない④を必ず有し、他のモチーフが複数以上あるものは楠山正雄の影響を受けていると判断。

(7) 柳田国男『桃太郎の誕生』一九四二 三省堂

(8) また、柳田国男の「瓜子姫」は、中学校の国語教科書に採用されている(藤村作監修『総合中学国語 改訂版 二の上』一九五五 教育出版)。三訂版を含め、一九五六、一九六一まで掲載されていた。そのことも、「うりこひめ」という名称の広まりに関係すると考えられる。

(9) 関敬吾『日本昔話集成 第二部本格昔話二』一九五三 角川書店

(10) 『新百選 日本むかしばなし』(年表36番)。なお、「姫の皮を剥ぐ」モチーフは割愛されている。

(11) 松谷みよ子『昔話十二か月 七月の巻』一九八六 講談社 など

(12) 姫の生存・死亡にかかわらず秋田以外では見られない「あまのじやくと姫がはきもののやりとりをし、最後は桶などに入れて負ぶって連れて行く」モチーフを含み、秋田ではほぼ必ず挿入される「カラスが真相を告げる」ものは、関く松谷までの流れを汲むものと判断する。(秋田の型は関敬吾や松谷みよ子の活動で有名になったと考える)

(13) 今回確認できたのは平田昭吾『うりこひめ』(年表14番)のみ

(14) 関敬吾『日本の昔ばなし(一)』では瓜子姫(ここでは瓜姫)はあまのじやくに体に乗っ取られ、最後には死亡する。山田貢『思出の夜話あったとき』所収のものが元となっている。この型を含む関敬吾の手による児童向け「瓜子姫」にかんしては、拙稿「関敬吾と瓜子姫―再話とその影響―」『立正大学大学院文学研究科 大学院年報』三一 二〇一四 を参照いただきたい。

(15) (1) 参照

(16) 喜多村信節『嬉遊笑覧』(一八三〇)にて「瓜姫の話など

是なり。今江戸の小児、多くは此話を知らず。」と記述している。

(17) 平林英子『うりひめ』(年表95番)

(18) (1) 参照 「うりこひめ」を最初に知ったのは絵本という回答がもつとも多かった。

(19) 横山泰子「女の敵はアマノジャク 昔話「瓜子織姫」系

絵本における妖怪」小松和彦編『妖怪文化叢書 妖怪文化の伝統と創造 絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで』

二〇一〇 せりか書房

(20) (7) 参照

参考文献

五味義武・山本誠子・田原美栄『低学年教育 童話教材とその

活用』一九二九 南光社

山田貢『思出の夜話あったとき』一九四二 自刊

関敬吾『日本の昔ばなし(二)』一九五六 岩波書店

岩沢文雄・小松崎進『民話と子ども』一九七〇 鳩の森書房

長谷川強等校訂『嬉遊笑覧』二〇〇五 岩波書店

(ふじい・みちあき／立正大学大学院)

◎児童向け「瓜子姫」年表

番号	出版年	元号	月	タイトル	収録書籍タイトル (タイトルとおなじものは省略)	作者 (文)	作者 (絵)	出版社	備考
1 2	1907 1911	M40 M44	8 4	◆瓜子姫 瓜子姫	家庭お伽話 第七篇 日本全国国民童話	高野辰之 石井研堂	鯨崎英朋 なし	春陽堂 宝文館	宮崎県のものが元。固い梨をぶつけられて気絶。生存型。 前半は鬼一口型(姫が外敵の侵入と同時に殺害される)・後半が「古屋のもる」
3	1921	T10	4	瓜子姫子	滑稽童話集	藤澤衛彦	不明	国民書院	
4 5	1922 1924	T11 T13	4 12	◆瓜子姫子 瓜子姫物語	日本童話宝玉集 下 ひろすけ童話読本 第2集	楠山正雄 浜田広介	不明 初山滋	富山房 実業之日本社	
6	1925	T14	6	◆瓜子姫子	小学校へ入る迄の子供に聞かせる話	加藤美侖	なし	誠文堂書店	山形県南部の型(鬼一口型)を元にして創作。死亡型。
7 8	1926	T15	1 10	瓜子姫の話 ◆ウリ子ヒメ子	黄金の馬 日本昔噺カチカチ山	森口多里 北村寿夫	なし 斎田たかし	実業之日本社 イデア書院	
9 10 11	1928 1930	S3 S5	9 2 10	瓜子姫 ◆うりこひめこ 瓜子姫	日本童話集 上 日本の昔話 上 一年生の童話	松村武雄 柳田国男 久米元一	なし なし 寺田良作	誠文堂書店 アルス 金の星社	
12 13 14 15	1937 1938 1941 1951	S12 S13 S16 S26	7 12 9 8	◆うりこひめこ ◆瓜子姫子 瓜子姫 うりひめものがたり	二学年上巻 巨人版 日本童話宝玉集 日本の昔話 ひろすけ家庭童話文庫3	浜田広介 楠山正雄 柳田国男 浜田広介	なし 不明 なし 不明	中行館書房 三國書房 主婦の友社	5番とはば同じ 4番の再収録 10番の再集録 5番の改訂版。姫がからすの活躍により生き返る。血のモチーフなし 死亡型
16 17			10 11	◆うりこひめ ◇うりひめ子	お話教室 小学1,2年 空へのぼったおけやさん	水谷まさる 関敬吾	大石哲路 鈴木寿雄	金の星社 大日本雄弁講談社	
18 19	1953	S28	8 9	◆うり子姫子 ◆うりこひめ	新版日本童話宝玉集中 二年ブック 3巻6号	楠山正雄 西山敏夫	川崎福三郎 井江春代	同和春秋社 学習研究社	
20 21 22 23	1954	S29	7 不明 2 3	うり子ひめとあまのじゃく うり子ひめとあまのじゃく ◆うり子姫子 うりこ姫	日本民話集4 三年生の少女童話	木村次郎 木村次郎 楠山正雄 平井芳夫	なし 人形座 大石哲路 石井健之	アルス エンゼル社 金の星社 大日本雄弁講談社	児童向け雑誌の記事。血のモチーフなし。 独自の展開をとる 当時、非常に人気のあったシリーズのひとつ。広く読まれたものと推測される。 児童向け雑誌の記事。血のモチーフなし
24 25				◆うりこ姫とあまのじゃく うり子ひめ	6年の学習 9巻12号 日本のむかし話 二年	西山敏夫 大藤時彦	市川禎男 高雄貞子	学習研究社 実業之日本社	
26 27 28 29	1956	S31	2 6 10 11	うりこひめ ◇うりこひめ うりこひめ ◇うり子ひめ	たのしく話せる日本むかしばなし 日本むかしばなし宝玉集 下 日本むかしばなし 三年生 日本のむかし話 二年生	山本和夫 塚原亮一 藤澤衛彦 大木雄二	不明 不明 斉藤としひろ 大石哲路	池田書店 宝文館 宝文館 偕成社	

30				◆うりこひめとあまのじゃく	小学四年生 35 巻9号	小野忠孝	黒崎義介	小学館	児童向け雑誌の記事
31			12	◆うりこ姫	つるの恩がえし 日本民話	徳永寿美子	羽石光志	偕成社	
32				うりこひめとあまのじゃく	ききみみずきん	木下順二	初山滋	岩波書店	後半は独自の展開を取る。現在でもよく読まれているもののひとつ
33	1957	S32	不明	◆うりこひめ		こうだやすし	はやしよしお	トッパン	血のモチーフなし
34			1	うりこひめ	日本むかしばなし	佐藤義美	柿本幸造	学習研究社	島根県のものが元。「道の選択」のモチーフを採用。
35				うりこひめとあまのじゃく		浜田広介	秋野不矩	福音館書店	5 番の省略版。姫が無事に助かる
36			8	◇うりひめこ	新百選 日本むかしばなし	坪田譲治	なし	新潮社	死亡型
37			10	◇瓜ひめこ		坪田譲治	中尾彰	金の星社	36 の再収録
38			11	うりひめものがたり	ひろすけ童話集 お日さまとばん	浜田広介	不明	日本書房	
39	1958	S33	1	◆あまのじゃくとうりこひめ	日本昔話二集	西山敏夫	黒崎義介	小学館	血のモチーフなし
40			3	うりこひめ	民話のふるさと	今管一	不明	アルス	
41			11	◆うりこひめ	かぐや姫	土屋由岐雄	鈴木寿雄	偕成社	血のモチーフなし
42			12	瓜姫	日本むかし話 天狗のかくれみの	永田よしなお	不明	鶴書房	関敬吾の岩波文庫版と同じ
43				瓜コ姫コとアマンジャク	日本民話選	木下順二	吉井忠	岩波書店	
44	1959	S34	6	◆うりこひめ	小学館の幼稚園 巻3号	奈街三郎	石田英助	小学館	血のモチーフなし
45			12	うりこひめ	観察絵本 キンダーブック 14 巻9号	浜田広介	黒崎義介	フレーベル館	
46			不明	◇うりこひめとあまのじゃく	かぐや姫	松谷みよ子	石井健之	あかね書房	生存型。血のモチーフなし
47	1960	S35	5	◇うりひめこ	日本のむかし話 (1)	坪田譲治	須田寿	あかね書房	36 番の再集録
48			7	うりこ姫コとアマンジャク	ばたんいろの童話集	いぬいとみこ	油野誠一	創元社	
49	1961	S36	7	◇うりこひめとあまのじゃく	おひめさまの童話集	松谷みよ子	水沢研	三十書房	生存型
50			12	◆うり子姫子	日本童話宝玉選	教育童話研究会	不明	小学館	
51	1962	S37	3	◆うりこひめとあまのじゃく	うしわかまる・かぐやひめ ほか	西山敏夫	矢車涼	小学館	血のモチーフなし
52	1963	S38	1	◇うりこひめとあまのじゃく	日本むかし話集	松谷みよ子	不明	講談社	生存型。血のモチーフなし
53			3	うりこ姫		北畠八穂	大日方明	講談社	
54			6	うりこひめ	子どもに聞かせる日本の民話	大川悦生	なし	実業之日本社	
55	1964	S39	1	うり子ひめ	かもとりごんべえ	与田準一	石井健之	ポプラ社	「道の選択」のモチーフあり
56	1965	S40	4	◇うりひめこ	いっすんぼうし	坪田譲治	柿本幸造	集英社	36 番の再収録
57			6	うりこひめ	日本むかし話	筒井敏夫	松本かつち	小学館	
58			11	◇うりこひめとあまのじゃく	おむすびころりん	松谷みよ子	佐藤忠度	講談社	生存型。血のモチーフなし
59	1966	S41	2	うり子ひめ	日本のむかし話 二年生	与田準一	小林和子	実業之日本社	55 番の改訂版
60			4	うりこひめとあまのじゃく	日本のむかしばなし	神沢利子	不明	研秀出版	「道の選択」のモチーフあり
61			6	うりこ姫コとアマンジャク	和尚さんときつね	いぬいとみこ	油野誠一	ポプラ社	48 番の再収録

62			10	うりこひめと あまんじゃく	わらしべ長者	おのちゅうこ う	田中武紫	集英社	後半は独自の展開
63			11	うりこひめ	小学館の幼稚園 巻 8 号	不明	谷悠紀子	小学館	児童向け雑誌の記事
64				◇うりこひめと あまのじゃく	むかしむかし	松谷みよ子	不明	童心社	生存型。血のモチーフ なし
65	1967	S42	2	ウリコひめと アマンジャク	母と子のお話図書館 3	小沢正	不明	三一書房	
66			10	◆うりこひめ	小学館の絵本 第 9 巻 12 号	小林純一	石部虎二	小学館	
67				うりこひめ	日本の民話	上崎美恵子	松本かつぢ	小学館	
68			11	◇うりこひめと あまのじゃく	日本の昔話 1	松谷みよ子	瀬川康男	講談社	生存型
69			不明	おとぎばなし うりこひめ		松谷みよ子	瀬川康男	鶴書房	古典『瓜姫物語』が元
70	1968	S43	2	うりこひめと あまんじゃく		木島始	朝倉摂	岩崎書店	後半は独自の展開
71			5	うり子姫	きょうのおはなしな あに 夏	生源寺美子	鈴木義治	ひかりのくに	
72			12	うりこひめ		村山桂子	遠藤てるよ	講談社	
73	1969	S44	不明	◇うりこひめと あまのじゃく		星野伊都子	若菜珪	山田書院	姫は木から落ちて気 絶。生存型
74	1970	S 45	4	うりこひめと あまんじゃく	おはなしいいな	安田浩	不明	白眉学芸社	32 番に近い展開
75			6	◆うりこひめと あまんじゃく		西山敏夫	鈴木寿雄	小学館	血のモチーフなし
76	1972	S47	3	◇うりこひめこ	二年生の日本むかし ばなし	江間章子	工藤市郎	集英社	
77			10	◇うりこひめ	日本昔話集	西本鶏介	なし	芸術生活者	
78			11	うり子姫	母と子のお休み前の 小さな童話	ワシオ・トシ ヒコ	不明	三交社	柳田の『日本の昔話』 が元か
79	1974	S49	2	ウリコヒメ	親と子の民話集 2	伊東挙位	小泉謙三	文化書房博 文社	鬼一口型
80			6	うり子姫子	日本編 7	倉島栄子	竹山のぼる	小学館	10 番とほぼ同
81			11	◇うりこひめと あまんじゃく		渋谷勲	八木義之介	蒼海出版	生存型
82	1976	S51	10	あまんじゃく とうりこひめ	母と子の日本の民話 8	竹崎有斐	石倉欣二	集英社	関敬吾の岩波文庫版と 同じ
83	1977	S52	1	◇うりこ姫とあ まんじゃく	山をめぐる話 豆に なったやまんばほか	竹崎有斐	小島直	家の光協会	
84			7	うりこひめ に ほんのはなし		たけもとかず こ	たきそうた	コーキ出版	関敬吾の岩波文庫版と 同じ
85			8	◇うりこひめと あまのじゃく	おむすびころりん ほか 日本むかし話	松谷みよ子	矢車涼	講談社	血のモチーフなし
86				◇うりこひめ	アジアむかしばなし 13 たすけたイノシシ	松山晴彦	田中秀幸	国際情報社	姫は木から落ちて気 絶。生存型
87			11	うりこひめと あまのじゃく	ゆきおんな	須知徳平	島田耕志	朝日ソノラ マ	姫は死亡するが復活す る
88				うりこひめ	日本むかしばなし	砂田弘	矢車涼	講談社	
89	1979	S54	5	うりこひめと あまんじゃく 日本民話より		堀尾青史	赤羽末吉	フレーベル 館	
90			10	◇うりこひめと あまんじゃく	日本むかしばなし	小暮正夫	小華和ためお	ポプラ社	姫は木から落ちて気絶。 生存型。血のモチーフ なし
91				瓜子姫	日本のむかし話 (二)	柳田国男	なし	ポプラ社	10 番の再収録

92	1980	S55	2	◇瓜 ひめ と あまのじゃく	まほうをとくむすめ	斎藤君子	櫛良春	ポプラ社	死亡型
93			5	うりこひめとあまんじゃく		西本鶏介	深沢邦朗	チャイルド本社	関敬吾の岩波文庫版と同じ
94			10	◇うりこひめ	日本むかしばなし 3	寺村輝夫	ヒサクニヒコ	あかね書房	死亡型
95	1982	S57	1	うりひめ		平林英子	三国よしお	全日本家庭教育研究会	児童学習誌ボビーの付録
96			不明	うりこひめ	うりこひめ・三年ねたろう	砂田弘	藤島生子	都市と生活社	島根県のものが元。「道の選択」のモチーフを採用。
97	1983	S58	6	うりこひめ		高橋克雄	高橋克雄	小学館	
98	1984	S59	11	うりこひめとあまんじゃく		木下順二	初山滋	岩波書店	32 番から独立して絵本になる
99	1983	S60	3	うりこひめ	日本のむかし話	大石真	若菜珪	学習研究社	
100	1985	S62	6	瓜子姫と鬼	日本の鬼ども 3	山下清三	中村景児	けやき書房	後半は完全に独自の展開
101	1986	S61	1	◇うりこひめとあまんじゃく	かちかちやま	木暮正夫	金沢佑光	小学館	死亡型
102	1987	S62	8	瓜姫と天邪鬼	おはなしのポケット (日本の民話選集)	ひがしおあやこ	小島直	ひかりのくに	
103			9	うりひめこ	母と子の日本むかし話	大藤時彦	なし	学習研究社	
104			12	◇うりこひめとあまんじゃく	フンなるほどなぜ話	木暮正夫	原ゆたか	岩崎書店	死亡型
105	1988	S63	3	うりこひめとあまんじゃく		武井直紀	田木宗太	チャイルド本社	関敬吾の岩波文庫版と同じ
106			8	あまんじゃくとうりこひめ		横田弘行	片岡昌人 人形デザイン	集英社	NHK で放映された人形劇の絵本版
107	1989	H1	6	うりこひめ	いっすんぼうし	立原えりか	間瀬なおたか	小学館	最後に姫が子供を産む
108	1990	H2	1	◇うりひめとあまんじゃく		水谷章三	岩本康之亮	世界文化社	
109			7	うりこひめ		神沢利子	渡辺三郎	偕成社	
110			9	瓜コ姫コとアマンジャク	日本民話選	木下順二	吉井忠	岩波書店	43 番の再収録
111			10	うりひめ		高野辰之	愛芽	おぼろ月夜の館・斑山文庫	1 番に息子が手を加えたもの。血のモチーフなし
112	1991	H3	7	うりこひめ	かっぱのおくりもの 7 月のおはなし	八百板洋子	不明	国土社	
113			11	うりひめとあまんじゃく		稲田和子	小西英子	福音館書店	
114			不明	うりこひめ		平田昭吾	大野豊	永岡書店	唯一の「アニメ絵本」。内容は様々な型の混合
115	1992	H4	5	うりこひめとあまんじゃく	お月さまのひとりごとのお話	松本聡美	田木宗太	くもん出版	
116	1994	H6	2	瓜コ姫コとアマンジャク	わらしべ長者 日本の民話二十二編	木下順二	赤羽末吉	岩波書店	
117			11	◇うりこひめ		松谷みよ子	つかさおさむ	童心社	生存型
118			12	◇瓜子姫とあまんじゃく	日本のお話 100	やすいすえこ	石倉欣二	フレール館	生存型
119			不明	うりこひめ		北川幸比古	石倉欣二	世界文化社	独自の展開を取る
120	1995	H7	6	うりこひめ	子どもに語る日本の昔話 1	稲田和子・筒井悦子	なし	こぐま社	長野県の型
121	1997	H9	5	うり子姫	きょうのおはなし なにに 夏	生源寺美子	鈴木義治	ひかりのくに	71 番の再収録
122			8	うりこひめとあまんじゃく	わらう死に神	望月正子	さのてつじ	ほるぶ出版	
123	1997	H9	9	◇うりこひめとあまんじゃく		松谷みよ子	土橋とし子	講談社	生存型

124	1998	H10	9	うりこひめとあまんじゃく	武鹿悦子	蓬田やすひろ	フレーベル館	
125	2000	H12	4	うりこひめとあまんじゃく	西本鶏介	池田げんえい	小学館	関敬吾の岩波文庫版と同じ
126				うりこ姫とあまんじゃく	武鹿悦子	千金美穂	フレーベル館	124 番の再収録
127	2002	H14	4	うりこひめ	岩崎京子	岡村好文	小学館	
128			7	うりこひめとあまんじゃく	西本鶏介	村上豊	ポプラ社	関敬吾の岩波文庫版と同じ
129	2004	H16	7	うりこひめ	大石真	坂本水津哉	学習研究社	
130			11	うりこひめとあまんじゃく	千葉幹夫	宇野亜喜良	成美堂	
131	2006	H18	11	うりひめこ	おざわとしお、やまぐちさちこ	おおたかいこ	くもん出版	青森県の型。生存型。押し入れに閉じ込められる
132	2007	H19	10	◇うりひめこ	新版 日本のむかし話一寸法師ほか全 19 編	坪田譲治	森川百合香	偕成社
133	2008	H20	12	◇瓜子 姫とあまのじゃくー新装版	松谷みよ子	ささめやゆき	講談社	35 番の再収録
134	2009	H21	10	うりこひめ	母と子のおやすみまえの小さなお話 365	千葉幹夫	水野ぶりん	ナツメ社
135	2010	H22	8	◇うりこひめとあまんじゃく	おひさま	松谷 みよ子	梶山 俊夫	小学館
136	2011	H23	3	うり子姫	子どもが眠るまに読んであげたい 365 のみじかいお話	田島信元	モリアート	永岡書店
137			4	うりこひめ	かちかち山	小澤昔ばなし大学再話研究会	杉浦範茂	小峰書店
138			9	うりこひめとあまんじゃく	おばけばなし：ぶるぶるドキドキ 30 話 親子の名作よみきかせ絵本	川村優理	喜多村素子	大泉書店
139			12	うりこ姫とあまんじゃく	頭のいい子を育てるおはなし 366	不明	山本祐司	主婦の友社
140	2012	H24	2	うりこひめとあまのじゃく	ようかいむかし話	藤田晋一	大井知美	金の星社
141			11	うりこひめ	おやすみ前のお話 366 話 第 3 巻 (7 月・8 月・9 月)	大石真	min	学研教育出版
142	2013	H25	10	うりこひめ	日本の昔ばなし 20 話	大石真	ふじいかずえ	学研教育出版
143	不明			うりこひめ	日本昔話	かみゆたか	駒宮録郎	ひかりのくに
144				あまんじゃく	一寸法師	井上明	田木宗太	童音社
145				うりこひめ		不明	石部虎二	ひかりのくに

◆Ⅰ型（高野辰之〜楠山正雄）①あまのじゃくが姫に徐々に戸を開けさせる ②怖い顔をしておどかして連れ出す
 ③「汚れるから」と着物を交換 ④突然、殿様の迎えが来て「殿と奥方が機織りを見たい」と言う ⑤姫が真相を告げる
 ⑥あまのじゃくは切られ、作物が染まる
 このうち 他にはほとんど見られない④を必ず有し、他のモチーフが複数以上あるものを楠山の影響を受けていると判断

◇Ⅱ型（関敬吾が取り入れ、坪田・松谷と継承された秋田の型）秋田以外では見られない「あまのじゃくが姫を負って連れて行く」モチーフを含み、秋田ではほぼ必ず挿入される「カラスが真相を告げる」ものは、関〜松谷までの流れを汲むものと判断する。（秋田の型は関や松谷の活動で有名になったと考えられる）